

特集 コミュニティの再生・創生と宗教

地域「コミュニティ」の創出と宗教

—スピリチュアリティの実践と取り巻く人々—

河西瑛里子¹

ある地域社会に現れた新しい宗教的实践は、そこに暮らす人々の間に「コミュニティ」を生み出しうるのか。ヒンドゥーに帰依するイギリス人による無料の食事配布とそこに集まる人々の関係性から探っていく。

¹ かわにしえりこ：大阪物療大学助教

1. はじめに

「この町には、沢山のコミュニティの「糊」があるんだ。教会の前で週1回、ただで食べ物を配っているのとかね」

(2009年10月22日インタビュー、50代前半のイギリス人男性)

ある日、調査地のカフェでインタビューをしていた相手から、こんなことをいわれた。彼のいう無料での食事配布とは、ヒンドゥーに帰依するイギリス人男性の活動の一環なのだが、インド人がほとんどいないこの町では「信仰の実践」というより、「食事の無料サービス」として認識されていた。本稿では、この食事配布を事例として、宗教的实践が地域に生み出しうる「コミュニティ」の可能性と、文化人類学的手法から現代社会における宗教とコミュニティの関係を研究する意義について考えたい。

筆者は2005年の秋以来、イギリス南西部地方サマーセット州にあるグラストンベリーをフィールドに調査と研究を続けている。ここは人口8932人(2011年現在、Somerset Intelligence)という、小さな田舎町なのだが、女神を崇める祝祭やケルト暦に基づく季節の祝祭が企画され、ヒンドゥーやスーフィズム、仏教に関係した集まりがイギリス人を中心として定期的に行われているため、風変わりな町として知られている。キリスト教に代表される、既存の教会制度や聖職者といった組織を通さず、個人で神的存在もしくは霊的な次元と関わり、宗教的な体験をすることで自己の成長を図る試みを「スピリチュアリティ」と呼ぶのなら、そんな宗教的实践がよくみられる町だ。

さて、「コミュニティ」という言葉が気になり始めたのは、ここで調査をしていた2009年頃である。この時期、冒頭の語りのように、インフォーマントとの会話や儀礼の場で、この単語を耳にする頻度が急速に高まっている気がしていた。このことは、先行研究の多くが述べてきた、スピリチュアリティに携わる人々は、1960年代の対抗文化運動以降、個人を聖なる存在に近いものと理解し、その結果自己への関心が高

い一方で、他者や社会全体への関心を示さないという指摘（Heelas 1992）と矛盾するように思えた。

宗教的実践のもたらす共同性に関して、たとえば宗教人類学の議論をみると、宗教的な儀礼や行為は、それに携わる人々の関係を強化し、当該社会を統合する機能をもつという指摘がある。儀礼のもたらす恍惚感を共有することで、成員どうしの間に一体感が喚起され、そこから感情を基盤とした共同性が生じ、社会全体がまとまっていくと考えられたのである（デュルケム 1975; ラドクリフ＝ブラウン 1975）。これは、非日常の場面で、日常の関係性から解放された人々が織りなす「コミュニティ」(ターナー 1996) のような状況だといえる。

しかし、宗教がもつ社会統合の役割は、非日常の場面に限定されるわけではない。近年では、儀礼を行うような場で育まれた関係性を、世俗的な場で活用することで、より満足度の高い生活がもたらされるとする議論がなされてきている。以下ではそのうちの2つをみておきたい。

よく知られているのが、1990年代から注目されているソーシャル・キャピタル（社会関係資本）論である。ソーシャル・キャピタルとは「個人間のつながり（社会的ネットワーク）およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」（パットナム 2006: 14）である。これは人と人との社会的な接触が、物的資本（もの）や人的資本（個人的特性）と同じように価値をもつという視点である。その代表的な論者であるパットナムは、アメリカ社会では、教会出席者は、教会での諸活動を通して「友人となった人々によって、他の形態のコミュニティ活動へと誘われ」るため、「世俗的組織にも関与し、投票その他の政治活動に参加し、また深いインフォーマルな社会的つながりを持ちやすい傾向が大きい」と述べる（パットナム 2006: 74）。そして、本稿でいうところのスピリチュアリティのような宗教的実践にはコミュニティからのサポートがないと述べている（パットナム 2006: 83）。スピリチュアリティの台頭と伝統宗教に代表される組織的な宗教の衰退によって、地域の人々が集まる社交的な場は失われ、そのことが地域社会の崩壊を引き起こしていると、パットナムはみるのだ。

もう1つは、同じく1990年前後から研究が活発化していった幸福学(happiness studies)¹⁾である。こちらでも繰り返し他者の存在の重要性は指摘され、そのような関係性を創り、維持する源の1つとして、宗教が挙げられている(Baker 2013; Gilbert 2013; Graham 2013)。ソーシャル・キャピタル論と同様、幸福学においても、キリスト教やイスラムなどのいわゆる伝統宗教のみが、他者とのつながりをつくる役割をもつとされている。スピリチュアリティのような実践に携わる人々は「宗教的なコミュニティをもたない」ため、「変化の風と闘う連帯や仲間の支援がないから、今日のような社会経済の状況の圧力に神経質で傷つきやすい」(Gilbert 2013: 166)とされる。

つまり、ソーシャル・キャピタル論や幸福学では、スピリチュアリティの「コミュニティ」というものは想定されていないのである。その一方で、宗教社会学において、スピリチュアリティは、一般的には大きな組織ではなく、小さなグループでの活動が特徴的とされ、その形態は「ゆるやかな共同性」「ネットワーク」という言葉で表現される。筆者はこれまでに、女性原理としての女神を崇拝することで、自己変容を目指す女神運動をスピリチュアリティの事例として調査し、参加者は他の参加者との間につながりを求めているが、過度の親密性は求めていることを指摘してきた(河西 2013b, 2015a, 2015b)。

本稿では、教団や教会制度に基づく「宗教的なコミュニティ」とは異なる形での集合のあり方が、スピリチュアリティに携わる人々の間で「コミュニティ」のようなものとして機能している様子を示し、新しい形での宗教的实践が地域社会に果たす役割について考えていく。そして、スピリチュアリティが創り出す「コミュニティ」を理解するために、実証的な調査に基づく文化人類学が有効だと示したい。

以下では、まず、グラストンベリーの概要について述べ、事例として取り上げる、冒頭で触れた食事配布を行っている男性について紹介する。その後、活動の様子と携わる人たちについて記述し、考察を行う。なお、主催者が帰依しているのはヒンドゥーだが、南アジアではなくヨーロッパにルーツをもつ人が携わる場合、その実践は一般的にスピリチュ

アリティとして分類される。

本稿の現地調査は、主に2006年4月から9月と2009年1月から2011年1月に行った。データは、毎週の食事配布の参与観察と集まる人々との会話、2009年10月20日に実施した主催者へのインタビューから収集した。それ以外に、主催者が運営する「シェキナシュラム (Shekinashram)」というベッド・アンド・ブレックファスト (以下B&B) 兼スピリチュアル・センターのウェブサイトも参考にした。なお筆者は2009年10月3日から10日の1週間、シェキナシュラムにスタッフとして住み込んだ。それ以外に、この施設が主催する、毎昼の菜食ランチと毎週のインド音楽のコンサート、バジヤン (bhajan) に、それぞれ3回ずつ参加した。本文中の年齢はすべて2010年当時のものである。また、ヒンドゥーの用語は、現地語、つまり英語読みで記述している。

2. グラストンベリーの概略

グラストンベリーはかつて、農業と羊皮加工業で知られた町であった。しかし、EU加盟に伴う関税の撤廃と人件費の高騰に伴う国内産業の空洞化のため、双方とも衰退し、高学歴の若者の流出と失業者や生活保護受給者の増加が問題になっている、イングランドの典型的な田舎町である。

その一方で、先述したようにイギリスではかなり特殊な町として知られている。なぜなら、ヨーロッパの先住民とされるケルト人や正統的な解釈とは異なるキリスト教にまつわる伝説、そして中世に繁栄を極めた修道院の跡地が残っており、神秘的な事柄に関心がある人々を魅了し続けてきたからである。既存の価値観に反発する対抗文化運動が始まった1960年代後半以降、町に伝わるキリストやアーサー王の伝説に魅かれた人々が多数訪れるようになった。1970年代に近隣の村で始まった、野外ロック・コンサートも訪問者の増加を後押しし、1980年代からは、物質主義的な豊かさより、精神的に充足した生活を求める、都会からの

移住者も現れ始める。このようなスピリチュアリティへの関心が高い人々がやってきた時期は、工場の海外移転により、町の経済が衰退し始めていた頃だった。彼らは生活のため、町に増えていた空き店舗を借りてスピリチュアリティ関連商品を売る店を開いたり、セラピーやワークショップを提供したり、自宅を利用した B&B を始めたりした。その結果、グラストンベリーはスピリチュアリティ関連の事柄なら何でも揃う「聖地」として、旅行者をより一層呼び込むこととなり、町は活気を取り戻し始める。町の変貌を快く思わなかった地元民もその経済効果を認め、2000 年代に入ってからスピリチュアリティ目的の訪問者を、積極的な誘致はしないが歓迎するようになっている（河西 2013a）。

現在、町の中心部にはヒーリング・センターや菜食カフェだけではなく、魔法道具やスピリチュアル・グッズのショップに、オカルト書籍専門店まで立ち並ぶ。巨石文化やミステリー・サークルについての講演会が毎年開かれるだけではなく、自己成長を促したり、「癒し」の技を身につけたりするようなワークショップが、毎日のように開催されている。町でみられるヒンドゥー由来の信仰、仏教、スーフイズムなどキリスト教以外の宗教に携わる人の中心は、町の人口の 92.5%（UK Local Area）を占める白人である。

町で見られるヒンドゥーに関係する集まりについて説明しておく。まずクリシュナ意識国際協会²⁾（International Society for Krishna Consciousness, ISKCON）が、1年に1回、巡礼を兼ねた集まりを開いている。70人ほどの参加者の多くは、ロンドンなどからの訪問者で、住人は少数だった。参加者は講演だけでなく、インド音楽に合わせて全身で踊りながら、エクスタシー状態を楽しんでいた。2006年頃には、町内のある B&B で、オーナーのフランス人男性が毎週、詠唱とその後の共食の集まりを開いていたが、彼がインドに移住したことで中止となった。また 2010 年には、イスラエル人男性が自宅で同様の定期的な集まりを開き、時々仲間数人と町内で「ハレ・クリシュナ」と唱えながら行進する様子がみられた。

もう 1 つは、オショー・ラジニーシ運動³⁾である。グラストンベリー

では2006年から2008年にかけて、アクティヴ瞑想と静的瞑想を組み合わせたクンダリーニ瞑想の集まりが、ある男性信者が経営する画廊で毎週開かれていたが、画廊の閉鎖後は定期的な活動は行われていない。ただし、町に暮らす信者数人は互いにゆるやかな交流を続けている。

その他、超越瞑想（TM）が、ある男性により長らく続けられている。しかし、ここまで述べてきたように、こういった個人主体の集まりが長期に続くことは稀で、たとえば、ある女性が開いた、インドの聖者ラマナ・マハルシの教えに基づく瞑想の集まりは数か月で終わった。

なお、南アジア系の住人の割合は0.2%（18人）と全国平均の2.5%と比べて圧倒的に少ない（Office for National Statistics, UK Local Area）。彼らが主体となって開催しているオープンな集まりは、スィク教やジャイナ教などヒンドゥー以外のインド由来の信仰も含めて、全くみられなかった。

3. クリシュナへの帰依者イラーン

毎週の無料の食事配布の正式名称は「グラストンベリーでの毎週のプラサーダム配布（Glastonbury Weekly Prasadam Distribution）」である。しかし、町の中では主催者が運営するシェキナシュラムが配布している食べ物という意味で、「アシュラム・フード（Ashram Food）」として知られている。よって、以下でもこちらの名称を用いる。本章ではこのアシュラム・フードの背景を主催者の経歴と活動から説明し、次章で具体的な配布の様子を記述する。

食事の無料配布の主催者は、イラーン・ケシャヴァという40代前半のイギリス人男性である。彼はヒンドゥー神クリシュナの帰依者で、バクティ・ヨーガ（Bhakti Yoga）の実践者である。彼とその家族が運営するシェキナシュラムは、清掃と整理が行き届いているためか、空気が清浄な感じがする。2006年5月、筆者が初めて訪れた時の様子をフィールドノートから抜粋してみよう。

町の少し外れの坂を上っていくと、外壁に埋め込まれた、こげ茶色で金属製、高さ 50 cm 位の円筒の物体を見つける。6 つもある。チベット仏教の仏具、マニ車だ。回せば経を唱えるのと同じ功德があるらしく、少し力を込めて、くるん、くるん、くるんと回していく。円筒は滑らかにくるくと回っていく。そのすぐ隣には、サンスクリット文字が埋め込まれた分厚い木製の門があり、敷地を守っている。門をぐっと押し開けて入る。

その庭の緑の芝生は刈り込まれ、花は鮮やかに咲き誇り、全体的によく手入れされている。ところどころにヒンドゥーの神々や仏陀の像。木製のロジやモンゴル式のテントのユルトが合わせて 4 つ、客室として設置されている。母屋は向かって左にある 2 階建ての建物だった。

室内は土足厳禁である。入り口の右側が台所とダイニングで、客室はすべて 2 階にある。左側にはオフィスがあり、さらにその左隣は絨毯敷きの 20 畳ほどの部屋となっている。この内部でまず目を引くのは、ヒンドゥーの神々を祀った壁際の祭壇だ。黒い布を床に直接敷き、その中央に踊っているシヴァ像（シヴァ・ナタラージャ）がしつらえてある。その他、象の顔をもつガネーシャ像、チベタンベル、ろうそく、パワーストーンなどが置かれ、生花が彩りを添えている⁴⁾。入口の横の台には、女神ラクシュミーのカードとろうそく。部屋の隅には、畳より一回り小さい布マットと丸く分厚い座布団が積み重なり、瑠璃や紫水晶の原石もところどころに置いてある。別の隅には 1 メートルほどの高さの仏像があった。この部屋は、シェキナシュラムが主催する各種イベントに使われる他、ヒンドゥーに限らず、外部の団体に貸し出されているとのことである。

このようにシェキナシュラムは、仏教やチベット仏教の要素も取り入れつつ、ヒンドゥーの信仰を實踐できるようにつくられた施設である。毎日、朝には神への賛歌キルタン（Kirtan）の詠唱があり、昼には菜



写真1 ヒンドゥーの神々を祀った祭壇 2009年10月4日撮影

食ランチを有料で提供している（2006年は7ポンド≒1400円）。

オーナーのイラーンは、ドレッドヘア風のような髪を肩まで伸ばし、ひげも長く、いつもクルタ・パジャマと呼ばれる、インドの男性の民族衣装を身につけている。2006年にアルゼンチン出身のセラピストの女性と結婚し、2010年に誕生した娘とともに、シェキナシュラムにて暮らしている。彼はいったい、どのような人物なのか。以下、本人へのインタビューと施設のホームページに基づき、記述する。

イラーンはロンドンの出身で、西洋音楽のミュージシャンとしてベースを弾いていた。同時に10代の頃から様々な信仰に関心を持ち、とりわけヨーガをいくつか実践してきた。1995年にグラストンベリーに移住した後は、ヒンドゥーへの傾倒を深めていき、たとえばミュージシャンとしては、西洋音楽の演奏はやめ、ヒンドゥーの神々を讃えるインドの唱歌バジャンに専念している。また、サティヤ・サイババ・センターだった建物を買取り、2003年からシェキナシュラムを始めてからは、神やグルに自分を捧げ、絆を深める信仰的なヨーガとされるバクティ・ヨーガを学び、先述した毎朝の賛歌キルタンの詠唱や、聖者を招いてのワークショップという形で実践している。シェキナシュラムのホームページによれば、呼吸に焦点を当てたラージャ・ヨーガ (Raja Yoga) に関しては、体を動かすアイアンガー・ヨーガ (Iyengar Yoga)、呼吸

法のアシュタンガ・ヨーガ (Ashtanga Yoga)、西洋風アレンジされた呼吸法、瞑想、姿勢のシヴァナンダ・ヨーガ (Sivananda Yoda) を学び、実践してきたし、ニャーナ・ヨーガ (Jnana Yoga) における自己探索の方法を講師として教えていたこともある。

現在、彼は熱心なクリシュナ信仰者として知られているが、それは最近のことだという。

前からクリシュナ信仰には関心があって、いろいろな集まりや講演会に参加していたよ。けれど、出たり入ったりといった感じで、そんなに熱心ではなかった。3年前から熱心になり始め、毎年どんどん熱心になっている。以前は悟りというか、意識の覚醒というか、どの信仰というわけではなく、全体的に関心があったんだ。そこから、クリシュナ信仰に入っていく、2年前に完全に入ることにした。

(2009年10月20日、本人へのインタビュー)

クリシュナ以外の信仰にも関心をもっていた頃の名残が宿泊施設の名前にある。「シェキナシュラム」の「アシュラム」はヒンディー語で道場を意味するが、「シェキナ」⁵⁾ はイラーンがシェキナシュラムを始めた当時に関心をもっていた、ユダヤ教に由来する「女神」である。

また、施設内では、牛乳も含め、動物由来の食品の摂取を一切禁じている。この絶対菜食主義も、クリシュナ信仰ではなく、「牛乳は仔牛のための乳であり、人間は母乳を終えたら乳を飲むべきではないんだ」(2009年10月20日、本人へのインタビュー) という彼個人の動物愛護の信条に基づくものである。

ここまでのことから、シェキナシュラムとは、異なるスピリチュアルな実践からの影響を保ちつつ、クリシュナに帰依し、バクティ・ヨーガを実践している男性が運営している施設だといえる。

4. アシュラム・フード

続いて、アシュラム・フードについて記述する。2007年4月頃始まった、この食事配布は、毎週水曜日の午後5時から、町のハイ・ストリートにある、イングランド国教会の前で行われている。配られるのは、ダルという豆が入ったカレーと野菜のカレー、ライス、野菜サラダ、フルーツサラダである。具材が毎週異なるのは、前日の火曜日に開かれている市場に出店している有機野菜の販売者から、売れ残りを一括で安価に購入しているためである。つまり、売れ残った野菜の種類で、翌日のアシュラム・フードの中身は決まる。

調理は午後2時ごろから2時間ほどかけて、イラーンを中心とした、シェキナシュラムの人々が行う。彼らは、低価格⁶⁾で宿泊できる代わりに毎日4時間働くスタッフと、日中のみ手伝いにやってくる無償のボランティアに分けられる。

スタッフとして滞在していた時、無料配布の理由を、イラーンの妻のラディに尋ねてみた。

食べ物をただで配るのは、私たちの信仰の伝統だから。インドのアシュラムでは毎日配っているけれど、ここはインドではないので、



写真2 アシュラム・フードの配布 2011年9月21日撮影

週1回にしています。私たちは、人にあげた分だけ、自分たちにも返ってくると考えています。

(2009年10月7日、調理中の会話より)

ラディの語るように、イギリスでもヒンドゥーの他、スィク教など、インド由来の信仰の団体は、自分たちの信仰の実践の一環として、信者に限らず、あらゆる人を対象として、食事を無料で配布している。寺院の中で配布するだけでなく、たとえば大学のキャンパスで配っていることもある。しかし、大都市ではよく見かける光景でも、白人以外の人口が少ない、グラストンベリーのような田舎町では、街頭での食事の無料配布という行為は珍しい。そのため、しばしばホームレスに向けられた配布として誤解されていた。

調理された約100人分の食事は、それぞれ鍋やボウルのまま、机や食器とともに施設のワゴン車に積み込まれ、配布場所の教会の前に運ばれる。筆者がスタッフとして同行した日のメニューは、玄米、野菜カレー（カブ、グリーンピース、トマト、ナス）、ダルのカレー、サラダ（ニンジン、ホウレン草、ビートルート、レタス、キュウリ、ミニトマト）、デザート（バナナ、ブドウ、イチゴ、パイナップル、ヨーグルト）であった。到着すると、折り畳み式の机を広げ、紫色の布をテーブルク



写真3 ある日のアシュラム・フード 2010年10月14日

ロスとしてかけ、鍋やボウルをしつらえる。プラスチックケースから、紙皿とプラスチック製のフォーク、お玉も出しておく。そして、ヒンドゥーの神々の絵やアンマ⁷⁾などの聖者の写真をしつらえ、「Free Food」と書かれたボードをたてる。

5時に近づくと、すでにその場に集まっていた人々が、香辛料の匂いにひきつけられるように列をつくっていく。配布は流れ作業である。熱さとしみだしを防ぐため2枚に重ねた紙皿の上に、まず1人目がライスと野菜カレーをよそい、列に並んでいる人に渡す。2人目はこの皿にダルのカレーをかけ、3人目が野菜サラダとフルーツを脇に添える。通常、3人のボランティアがよそいが、2人や4人の時もある。フォークは再利用するので、食後は戻すように呼びかけなくてはならない。紙皿は歩道に設置された公共のごみ箱に捨ててもらう。たまにプラスチックの容器を持参してくる人もいる。鍋とボウルが空になれば終了だ。すべてをワゴン車に積み込み、シェキナシュラムに戻る。筆者が同行した日は不幸にも雨が止まず、だいぶ余ってしまったが、6時には撤収した。

食事の配布は、シェキナシュラムのスタッフも加わるが、配布作業だけを手伝うボランティアが中心となっている。厳密な当番制ではなく、ボランティア・リストもない。その日、用事がなければ手伝い、忙しければ休むといった具合である。そのため、日によって人数に変動があり、同行するスタッフの人数も変わってくる。ボランティアたちは調理された食事をワゴン車に積み込む頃にシェキナシュラムにやってきて、片付けを済ませるまで手伝う。筆者が手伝った日は、20代後半の男性と60代後半の男性がボランティアとして加わっていた。2人ともグラストンベリー在住で、クリシュナ信仰やバクティ・ヨーガに関心はあるものの、熱心な実践者ではない。どちらかという、無料での食事配布という活動に共感し、手伝っているとのことであった。20代後半の男性は、この日からしばらくしてボランティアをやめてしまったが、60代後半の男性は「人と出会えることが楽しいから」と、筆者が2014年に再訪した時も含め、ほとんど毎週カレーをよそい続けていた。

続いて、食事に来る人たちについて説明する。どちらかという男性

が多く、年代は60代以下が大半で、100人ほどが来ている。イベントが開催されるなどして、夕方、通りに人が多い時は、それ以上来るが、先述のように悪天候の時には50-60人ほどしかやってこない。宣伝はしていないので口コミでやって来るが、たまたまその時間、その場に居合わせて列に加わる人もいる。受け取った人の多くは、まだ5時過ぎにもかかわらず、その場で次々と食べ始める。この辺りには5人掛けのベンチが数脚あるのだが、食べ終わっても、ベンチでくつろいだまま、帰らない人が少なくないため、すぐに席はなくなってしまう。そうになると、立ったまま食べ始める人もいるし、路上にどっかり座り込んで食べる人も出てくる。「胃に入ればどうせ同じ」とカレーもサラダもフルーツも一緒にぐちゃっと混ぜて、豪快に頬張っている人が多い。

1人で黙々と食べている人もいるが、知り合いを見つけ、もしくは知り合いと連れだってやってきて、自分の近況や共通の知り合いのことなどを、おしゃべりしながら食べているのがふつうである。1人で来る人が多いが、夫婦で連れ立ってくる人もいるし、幼い子供の手を引いてくる人も少なくない。常連もいれば、その常連に連れられてくる人、たまたま通りかかって列に加わる人もいる。誰かが持参のギターを鳴らし始めると、その周りに人が集まり、即興のライブが始まることもある。シェキナシュラムの人々が食事の配布を終えて、帰ってしまっても、そ



写真4 ベンチでカレーを楽しむ人々 2011年9月21日撮影

のまま残っておしゃべりを続ける人もいる。

続いて、筆者が体験した他者との交流について簡単に記したい。スタッフとして参加した以外の週は、ほぼ毎回、容器をもって通っていた筆者は、間違いなく常連の1人だったといえる。列に並ぶと、大抵は常連の友人がいて、気楽な挨拶を交わし、他愛のない話をしていた。しばらく町を離れていても、水曜日のこの時間にこの場所に行けば、誰かに会うことができた。そこに来ていたB&Bを経営する友人から、宿泊客であるグラストンベリーを研究する大学院生を紹介してもらったこともあるし、冒頭で示したインタビューの相手ともこの場で知り合い、この場で約束を取り付けたものだった。

当時、食事が終わった後も、人々が食べたり話したりしている様子を嬉しそうに眺めている男性がいた。70代前半で家族がいない彼は、普段は1人で食事をしているようで、「ここに来れば、いろんな人に会えるからいいよね」と穏やかに話してくれた。

このように、アシラム・フードの時間は常連の人々にとって、そこに行けば誰かしら知り合いに会えると期待できる場、新しい知り合いをつくることのできる場として機能しているように思える。

このような雰囲気を感じて常連となる人々がいる一方で、列に並ぶことを頑なに避ける人も多い。たとえば筆者が2009年に居候していた女性（60代前半）は20代前半の娘がシェキナシラムでしばしばボランティアをしていたため、シェキナシラムにはなじみがあり、娘が時折もち帰る、ここのカレーを気に入っていた。しかし、自らが並ぶことはなかった。理由を尋ねると、「カレーはおいしいよ。でもあの人たちの中に入るのはちょっとねえ……」と言葉を濁した。彼女のいうように、この食事配布に集まってくる人々には、小ざれいとはいいいがたい格好の人、職業不詳（おそらく給付金受給者）やホームレスといった雰囲気の人が少ない。ゆったりとしていて、カラフルな南アジアの衣装を小汚いまま身につけている人や、ぼさっとしたドレッドヘアの人も男女を問わず目立つ。裸足だったり、古代文明やオカルトに由来するシン

ボルが描かれたジャケットを着ていたり、そのようなシンボルのアクセサリーをじゃらじゃら身につけていたりするなど、イギリスの一般的な常識と照らし合わせると、突飛な装いの人が目立つ。このような外見の人々は、町の中でも社会的階層が低く、経済的にも厳しい状況にあるとみなされがちである。それだけでなく、しばしば精神的な問題を抱えているとも噂される。つまりこの食事は、生活困窮者のみを対象としているわけではないのに、社会の落伍者と他の住人からみなされてしまうことを恐れて並ばない住人もいるのだ。危惧するだけではなく、警察に訴えた住人もいた。その結果、2009年2月には付近での犯罪率が上がったとして、警察は配布を強制的に中止させている（常連の一部が証拠はないと抗議したこともあり、2か月後には再開が許可されている）。

しかし、アシラム・フードを避けている人々も「食事の無料配布」という行為自体は「いいことをしている」というように好意的に評価している。それゆえに主催者やその信仰、彼が運営する施設の評判は高い。

5. おわりに

ここまで述べてきたように、アシラム・フードは他者に利することが自らの徳になるという、ある意味、主催者の利己的な意図の下に行われている。その一方で、結果として利他的となるこの活動は、町の人々の間で、主催者とその信仰や運営する施設の印象の向上に役立っている。これは、日本では新参の信仰をもつムスリムが、モスクを拠点として、震災時に炊き出しを行ったり、地域の祭りで屋台を出したりして、地域社会に溶け込んでいく様子と似ている。

ただしアシラム・フードの活動は、地域に暮らす住人が、一時的ではなく数年にわたって、高頻度で継続していることから、非常にゆるやかな形ではあるが、集まる人たちの間にある種の関係性を生み出している。集まる人すべての間にはないが、その場にいる個人が別の何人かの個人と結びつき、それが繰り返されることで、クモが巣を張るように⁸⁾ 結びつきが広がっていく。毎週ではなくても、時折その場に集い、

顔なじみの人たちと立ち話をする事で結びつきは継続し、新しい人々と顔見知りになっていくことで新たな結びつきも生まれていく。

常連の多くは、この食事配布が主催者の信仰に寄与する実践だと知っており、一方的に恵んでもらっているわけではない、受け取ることが主催者たちのためにもなると理解している。つまり、彼らは恵む／恵まれるといった上下関係を意識せずともよいと感じつつ、食事を受け取っているといえる。さらに付け加えると、60代のボランティア男性の参加動機に表れているように、受け取る側の間だけではなく配布する側も、受け取る側の「クモの巣」創りに加わって、関係性が生じているといえる。アシラム・フードの場におけるやり取りの観察からは、このような集合のあり方に、人々がゆるやかな帰属感と安らぎを覚えている様子が伺える。

とはいっても、ここにみられる人々の集合は、配布する側も受け取る側も「メンバー」と意識するほどのかっちりとした枠組みはもたないし、それゆえに内と外を分かち境界線もない。また、この場に來ない住人のほうが圧倒的に多いので、町全体で「クモの巣」を織りあげることではないし、町のスピリチュアリティに関わる人すべてが加わっているわけでもない。主催者がここに集う人々をまとめあげようと意図的に働きかけるわけではないし、やってきた人たち全員が互いに面識をもつわけでもない。そのため、ところどころに個人的な結びつきがみられるという程度のこの状況を「コミュニティ」の事例として取り上げることには違和感をもたれるかもしれない。

しかし、グラストンベリーの町の中には、本稿で示したような、人々を結びつける「糊」を与える場はいくつもある。スウェーデン人スーフィの女性信者が運営していたチャリティショップ（2014年11月閉鎖）。ボランティアによって管理されている女神神殿やホワイトスプリング。有志が企画する5月1日のベルテーン祭。スピリチュアリティに携わる人々は、こういったいくつもの「糊」を提供する場の中から、自分の好みに合うものを選んで参加し、それぞれの場で他の人々と繰り返し顔を合わせる。それによって、場と行為を共有する人々が部分的に

結びつき、まとまりが生まれる。弱いながらも凝集性をもち、不明瞭ながらも境界線のある、このようなまとまりは「コミュニティ」と呼べるのではないか。そして、このような小さなコミュニティの重なり合いが、結果として町全体を覆うような、1つの大きなコミュニティを創り上げていく。筆者にはそう思えるのだ。

本稿の事例が示唆しているのは、スピリチュアリティのような新しい宗教的実践が地域に与える可能性である。儀礼などの宗教的な昂揚ではなく、食事の配布という生存に必要な最低限の幸せを満たす形で信仰を実践し、その信仰を町の人々に受け入れてもらう。そして信仰とは必ずしも結びつかない形で、地域社会の人々の間に部分的ながらも結びつきを生じさせる。そのことはその社会にある種の共同性を生みだす一助となりうるのではないか。

最後に、文化人類学的手法から、スピリチュアリティのような現代に特徴的な宗教的実践とコミュニティの関係を研究する意義について考えたい。本稿で取り上げたイギリス人のクリシュナ信仰にしても、筆者が長年研究してきた女神運動にしても、スピリチュアリティとは、宗教的な事柄の個人的な体験に基づいて、自己成長を目指す宗教的実践だとすれば、それは人生の危機や悩みに遭遇した時の対処法を示しうる。いいかえれば幸福を求める実践だといえる。

先行研究において、スピリチュアリティに携わる人々は、既存の宗教に携わる人々と比べて「コミュニティ」をもたないため、幸福度が低いとみなされてきたと述べた。しかしそれは、他者との関係性が生まれる場を儀礼などの宗教を実践する場に限定して考えているからであり、日常生活の中に信仰をもつ個人や信仰に基づく集団が埋め込んだ、人々を凝集するようないくつもの「糊」を考慮していないからだと思われる。初めに紹介した幸福学では、これまで主流だった世界中で同じ指標を利用し、質問用紙を用いる量的な調査では、言語ごとの「幸福」という言葉のニュアンスの違いや、回答者の文化的差異が十分に考慮できないとして、近年、文化人類学者の間から、質的調査の必要性が指摘されている(Mathews 2013; Miles-Watson 2011; Kingfisher 2013; Thin 2015)。

同様に、宗教的実践が異なれば、そこから生まれる「コミュニティ」のあり方も異なるはずである。スピリチュアリティのようにはっきりとした制度や組織をもたない宗教的実践の場合、この「コミュニティ」は少しみえにくいかもしれない。しかし、参与観察を伴う長期にわたるフィールドワークを行い、人々の結びつきの様相を眺めていくことで、浮かび上がってくるのではないか。さらにいうと、「コミュニティ」や「スピリチュアリティ」が、ともに幸福というキーワードで論じられるのであれば、いかにして人は幸福になれるのかを示してきた、幸せの経済学やポジティブ心理学の研究に対し、実証的な研究に基づく文化人類学はいかにして人々が幸福感を得ているのかという、幸福に至るまでのプロセスを明らかにすることで、帰納的に何らかの提言ができるのではないか。文化人類学の視点からスピリチュアリティとコミュニティを研究する意義は、この2つにあるといえよう。

謝辞

本稿は筆者の博士論文（河西 2013b）とそれに基づく刊行物（河西 2015a, 2015b）の一部を抜粋し、データ部分も含め、ほぼ全面的に改稿したものです。本稿の執筆にあたっては京都大学の田中雅一先生から丁寧なご指導をいただきました。グラストンベリーで出会った方々にもお世話になりました。調査の際は日本学術振興会の科学研究費補助金 22・7515 から助成を受けています。皆様にとっても感謝しております。

参考文献

Baker, Christopher "The 'one in the morning' knock: exploring the connections between faith, participation and wellbeing," in: *The Practice of Happiness: Political economy, religion and wellbeing*, eds. by J. Atherton, E. Graham and I. Steedman, London and New York: Routledge, 2013, pp. 169–183.

- Gilbert, Peter “Mental health, spirituality and religion,” in: *The Practice of Happiness: Political economy, religion and wellbeing*, eds. by J. Atherton, E. Graham and I. Steedman, London and New York: Routledge, 2013, pp. 157–168.
- Graham, Elaine “The ‘virtuous circle’: religion and the practices of happiness,” in: *The Practice of Happiness: Political economy, religion and wellbeing*, eds. by J. Atherton, E. Graham and I. Steedman, London and New York: Routledge, 2013, pp. 224–234.
- Heelas, Paul “The Sacralization of the Self and New Age Capitalism,” in: *Social Change in Contemporary Britain*, eds. by N. Abercrombie and A. Warde, Cambridge: Polity Press, 1992, pp. 139–166.
- Kingfisher, Catherine “Happiness: Notes on History, Culture and Governance,” in: *Health, Culture and Society* 5(1), 2013, pp. 67–82.
- Mathews, Gordon “Happiness and the Pursuit of a Life Worth Living: An Anthropological Approach,” in: *Happiness and Public Policy: Theory, Case Studies and Implications*, eds. by Y.-K. Ng and L. S. Ho, New York: Palgrave Macmillan, 2006, pp. 147–168.
- Miles-Watson, Jonathan “Ethnographic insights into happiness,” in: *The Practice of Happiness: Political economy, religion and wellbeing*, eds. by J. Atherton, E. Graham and I. Steedman, London and New York: Routledge, 2013, pp. 125–133.
- Thin, Neil “Happiness and the Sad Topics of Anthropology,” in: *University of Bath: Wellbeing in Developing Countries Working Paper* 10, 2015.
- 河西瑛里子 「オルタナティヴと対峙する地元民—イギリスのグラストンベリーにおけるニューエイジ産業をめぐる」(『宗教と社会』19号、2013年(a))、1–15頁。
- 河西瑛里子 『女神運動から紡ぎだされるつながり—イギリス南西部グラストンベリーにおけるオルタナティヴ・スピリチュアリティの文化人類学的研究—』(京都大学大学院人間・環境学研究科博士学位論文)、2013年(b)。
- 河西瑛里子 『グラストンベリーの女神たち—オルタナティヴ・スピリチュアリティの民族誌』法蔵館、2015年(a)。
- 河西瑛里子 「つながりへの希求と忌避—イギリス南西部グラストンベリーの女神運動にみる共同性のあり方」(『文化人類学』第80巻3号、2015年(b))、406–426頁。
- グラハム、キャロル 『幸福の経済学』日本経済新聞出版社、2013年。
- セリグマン、マーティン 『ポジティブ心理学の挑戦』ディスカヴァー21、2014年。
- ターナー、ヴィクター 『儀礼の過程』新思索社、1996年。
- デュルケム、エミール 『宗教生活の原初形態』上下、岩波文庫、1975年。
- パットナム、ロバート・D. 『孤独なボウリング』柏書房、2006年。

ラドクリフ＝ブラウン、アルフレッド・R.『未開社会における構造と機能』新泉社、1975年。
Office for National Statistics (<http://www.ons.gov.uk/>, 2016年9月14日アクセス)
Shekinashram (<http://shekinashram.org/>, 2016年8月10日アクセス)
Somerset Intelligence (<http://www.somersetintelligence.org.uk/census2011>, 2016年8月10日アクセス)
UK Local Area (<http://www.uklocalarea.com/?q=glastonbury>, 2016年9月14日アクセス)

注

- 1) 幸福学とは、経済学と心理学の領域から発展してきた、人々の幸福を取り扱う応用型の学問である。前者は「幸福の経済学 (happiness economics)」と呼ばれ、GDP (国内総生産) や所得といった経済的な指標だけでは測定しづらい、幸福度に関する統計的分析の国際比較の試みから始まった経済学である (グラハム 2013)。後者は「ポジティブ心理学 (positive psychology)」として知られ、病者や犯罪者を対象とするのではなく、一般の人々が一層幸福な人生を継続して送るための方法を科学的に追求していく心理学である (セリゲマン 2014)。
- 2) 通称ハレ・クリシュナ。インド人プラブパダが始めたヒンドゥーの一派。1966年にアメリカで協会を設立したこと、ビートルズのジョージ・ハリソンが強い関心を寄せていたことなどから、欧米に信者が多い。インド風のオレンジ色の衣装を身につけ、額にクリーム色の一筋のペインティングをしている。
- 3) インド人ラジニーシが 1970 年前後から始めた宗教的運動。性に対する革新的な思想や意識変容体験をもたらす瞑想法が、対抗文化運動に関心をもっていた西洋人をひきつけた。
- 4) なお、この祭壇の配置は絶対的なものではない。2009年10月の滞在時には、オレンジ色の布と、笛を吹くクリシュナ像と孔雀の羽根に変更されていた。その両脇にはクリシュナとラーダーの人形1対ずつと聖者の写真があった。
- 5) シェキナとは、ユダヤ教で神の「隣在」を意味するヘブライ語である。女性形であるため、とりわけカバラにおいて神の女性原理の相と理解されてきた。この理解に基づき、スピリチュアリティに携わる人の中には、シェキナを女神とみなす者もいる。ただし、イスラエル人にとっては、ユダヤ教を離れ、スピリチュアリティに携わっているとしても、本来女神でないシェキナを女神として受け入れることは難しいようである。

- 6) 1週間の料金は、3食込みで筆者が体験した2009年には50ポンド(≒6500円)、2016年は65ポンド(≒9750円)。
- 7) 1953年生まれのインド人女性。本名マーター・アムリター・ナンダマイー。抱きしめる聖者として知られる。
- 8) グラストンベリーでスピリチュアリティに携わる人々はよく、人と人との関係性を紡いでいくことを、クモが巣を張る様に合わせて、“weave”と呼ぶ。